

不均一な拡散を持つ非線形 Fokker-Planck 方程式 に対するエントロピー消散法

Yekaterina Epshteyn (The University of Utah)

Chun Liu (Illinois Institute of Technology)

水野 将司 (日本大学理工学部)*¹

次の周期境界条件を課した偏微分方程式の初期値問題を考える。

$$\begin{cases} \frac{\partial f}{\partial t} - \operatorname{div}(f \nabla(D(x) \log f + \phi(x))) = 0, & x \in \Omega, t > 0, \\ f(x, 0) = f_0(x), & x \in \Omega. \end{cases} \quad (\text{NFP})$$

ここで、 $\Omega = [0, 1]^n$ は n 次元トーラス、 $D : \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ は与えられた正值周期関数、 $\phi : \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ は与えられた周期関数、 $f_0 : \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ は与えられた確率密度関数であり、 $f : \Omega \times [0, \infty) \rightarrow \mathbb{R}$ は未知関数である。本研究の目的は、 f の時刻無限大での漸近挙動を解析することである。以下、 D, ϕ, f_0 は Ω 上の滑らかな関数とする。

D が定数のとき、(NFP) は、次の確率微分方程式

$$dx = \phi dt + D dB \quad (\text{SDE})$$

に対する確率密度関数がみたす Fokker-Planck 方程式として知られている。ここで、 B はブラウン運動である。このとき $\operatorname{div}(f \nabla(D \log f)) = D \Delta f$ に注意すると、(NFP) は線形の方程式である。さらにエネルギー等式

$$\frac{d}{dt} \int_{\Omega} (Df(\log f - 1) + f\phi) dx = - \int_{\Omega} |\nabla(D \log f + \phi)|^2 f dx \quad (\text{EI})$$

が成り立つ。特に、(NFP) の時刻無限大における漸近系の候補として、 $\nabla(D \log f + \phi) = 0$ をみたす関数 f^{eq} を考えることができる。他方、 D が定数でないとき、伊藤積分や Stratonovich 積分によって (SDE) のブラウン運動を定式化できるが、(SDE) に対応する確率密度関数がみたす Fokker-Planck 方程式はエネルギー等式 (EI) をみたさない。そこで、エネルギー等式 (EI) と連続の方程式を基礎にしたときに、どのような偏微分方程式であるべきかを考えてみると、(NFP) が得られる。

$$\operatorname{div}(f \nabla(D(x) \log f)) = D(x) \Delta f + \operatorname{div}(f \log f \nabla D(x))$$

となることから、(NFP) は非線形方程式となることに注意しておく。

*¹ 〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台 1-8-14

e-mail: mizuno.masashi@nihon-u.ac.jp

web: <http://www.math.cst.nihon-u.ac.jp/~mizuno>

本研究は科研費 (課題番号:JP22K03376, JP23H00085) の助成を受けたものである。

2010 Mathematics Subject Classification: 35K55

キーワード: 非線形 Fokker-Planck 方程式, エントロピー消散法, エネルギー等式

D が定数のときに f の長時間挙動を調べるためには、エントロピー消散法が有効であり、多くの研究がある ([1, 2, 4, 5]). 他方で、 D が x の関数であるとき、エントロピー汎関数を持つかどうかを判定することが困難となる. (NFP) はエネルギー等式 (EI) をみたすことから、エントロピー汎関数の候補として、 $D(x)f(\log f - 1) + f\phi$ の積分を考えればよい. 本研究では、拡散係数 D が十分に大きいときに、(NFP) の古典解 f について、(EI) の右辺が指数減衰することを示した.

定理 ([3]) $n = 1, 2, 3$ とする. $\gamma > 0$ に対して、 $C_1 > 0, C_2 > 0$ が存在して、

$$\min_{x \in \Omega} D(x) \geq C_1, \quad \int_{\Omega} |\nabla(D(x) \log f_0 + \phi)|^2 f_0 dx \leq C_2 \quad (1)$$

ならば、定数 $C > 0$ が存在して、(NFP) の古典解 f について

$$\int_{\Omega} |\nabla(D(x) \log f + \phi)|^2 f dx \leq C e^{-\gamma t}, \quad t > 0, \quad (2)$$

が成り立つ.

(2) から $t \rightarrow \infty$ のときに $\nabla(D(x) \log f + \phi)$ が 0 に収束すること、そして、 f が平衡解 f^{eq} に収束することが示唆される. D が定数のとき、(2) に Csiszár-Kullback-Pinsker 不等式を用いることで、 f が L^1 の位相で f^{eq} に収束することが示せる.

証明の方針は (EI) を t で微分して、微分不等式を導くことによる. $\mathbf{u} = -\nabla(D(x) \log f + \phi(x))$ と置くと、 ∇D を含む非積分関数を $G(\nabla D)$ とまとめて書くことにより

$$\begin{aligned} & \frac{d^2}{dt^2} \int_{\Omega} (Df(\log f - 1) + f\phi(x)) dx \\ &= 2 \int_{\Omega} (\nabla^2 \phi(x) \mathbf{u} \cdot \mathbf{u}) f dx + 2 \int_{\Omega} D(x) |\nabla \mathbf{u}|^2 f dx + \int_{\Omega} G(\nabla D) dx \\ &\geq 2 \int_{\Omega} (\nabla^2 \phi(x) \mathbf{u} \cdot \mathbf{u}) f dx + 2 \int_{\Omega} D(x) |\nabla \mathbf{u}|^2 f dx - \frac{1}{\min D(x)} \int_{\Omega} D(x) |G(\nabla D)| dx \end{aligned}$$

と書ける. C_1 を十分に大きくとることにより、 $G(\nabla D)$ の積分を評価できる. $|G(\nabla D)|$ に $|\mathbf{u}|^3$ の項を含むため、Sobolev の不等式を使うことから次元に制約がある.

参考文献

- [1] Arnold, A., Markowich, P., Toscani, G., Unterreiter, A., Comm. Partial Differential Equations, **26**(2001), 43–100.
- [2] Carrillo, J. A., Toscani, G., Math. Methods Appl., **21**(1998), 1269 – 1286.
- [3] Epshteyn, Y., Liu, C., and Mizuno, M., preprint, arXiv:2404.05157.
- [4] Jüngel, A., *Entropy methods for diffusive partial differential equations*, SpringerBriefs in Mathematics, Springer, 2016.
- [5] Markowich, P. A., Villani, C., Mat. Contemp., **19**(2000), 1–29.